

小學修身書

初等科

T1A1

22

(MO24)

明治十六年六月印行

初等科五

小學修身書



文部省編輯局

小學修身書卷之五

第一章

志一ハ。以つたり邪なく。誠ありて正し
かるべし。心の内を。たむひくまじりなく。
裏表なく。純一。青天白日の如く。な
るべし。一點も心の内。邪惡を隠して。
裏表あるべからば。志一正しきハ。萬事

の本なり。童子訓

君子いみづゝ。我が内心をかへり。よく思察して。少くも我が本心を阿ざむくをなく。一點も心中不疾まきよ。志し海の穢まきなき時。我が志し。於て。恥づゝ。大和中庸

かの小人。内は眞實の徳なくして。うをばらむ。飾る故。退きて我の

心中を顧ま。我が本心を阿ざむく故。我ふ。我の心不をづるなり。君子をか。る。同上

いつちりのなき世ありせば。いのか。人の言の葉。嬉し。古今集

人や約をふさ。かならば其信を固く守るべし。一度約したるを違へば。人ふ。若し其契約。義不

かふいぎるとり。又力の及び難きこと小
て。後小約を守り難のらんと思ふ。か
祿て約をたすべのらば。あるくく
受け合へば。其約違ふ。法く。一むべし。大
俗訓

第二章

唐の朱仁軌といへる人。常々子供弟供
を戒め教へたる。一生の間人小道を

譲りても。百足までいおくれず。一生の
間。畔をゆづりて。境目の論をたさず。こ
も。一段までの損をたきものありとぞ
いおれける。大和小學

人小對する。小温和よし。て。ゆるぐ。と。里
己は誇らず。人を侮らば。言葉少く。信實
小愛敬ありて。むのひよか。く。ん。こ。を。善
人といふべし。我が身輕。く。一。の。ら

小學傳 卷之五
正しけまば。温和ふれごも。人あ
などらば。大和俗訓

何事も。志らぬさましなるぞよた。自ら
を私ふむのまきて。よく志きりご思へど。
未だよく志らぬと多々れを。吾ら心ふ
ゆるし難し。よく志らで。志きりとまる
顔つきふるも。ふくし。大和小學

少し才ありと見え。物書き藝ある人

も。其心平實ふして。我が才をかくして。
誇らざる人い。おくゆるしくるい
と見ゆ多才なる人も。我が才を外は輝
かして誇る人い。其不徳なる癖のふと。
あらをれて浅まし。か。らざりせば善
このらゆしと思ひて。あたら才學何るも。
玉の盃乃そふなきが如く。思ひ下ださ
きて。其疵うらめし。文武訓

我が身を卑下して。人ふたのぶらざる
ハ。誠ふよし。されどあまり身屈ふして。
多りぐぐり過ごし。就くべき座敷さふ
ごふも。多やましく就ふず。道ゆくふも。我
が先へ行くべき位なれど。辭して行の
ずして。人の言葉を多く費やさしむる
も。返りて無禮なり。然まば卑下するふ
も。過不及なるべし。大和俗訓

第三章

人心の私を種ごして。知あるも愚ある
も。自満の心なきハ稀なり。此満心。明德
を失らま。禍をまねくをせものふし
て。萬のくるしみも。亦大なるは是よりた
まきり。翁問答

凡そ學問の上ふても。又世間の才智藝
能の業よても。上を仰げば。限りなきも

のなり。然きごも少々並みりまぐきて
覺えあるものを多くい。人を侮り辱づ
るしむるものなり。上もなき無禮なる
ことなり。何とあれば。何程人りまぐきた
る才智藝能有りても。高慢のものを徳
と背ける故ふ。凶人なり。又上を仰げば
限りなきことを知らざる故ふ。愚人あり。
さて才智藝能劣りたる人い。我は不調

法者なりと知る故ふ。自然と謙退して。
高慢の心なく。故ふ。才智藝能まぐきた
る人り對まれば。劣りたる人。返て有徳
の人といふなり。然きば不徳凶愚の身
少くして。有徳の人を侮るい。豈大なる無
禮なるとふあらずや。和語陰騭録
義理の學。文字の學ある人。又文學ある
ごも。一材一藝は長なる人ふあり。吾

が才學と藝能不誇らば。自らの黙して
言をせず。只其人乃志まざるを尋ねて。其
言語を慎みて。聞く處し。必ず益あるべ
し。吾が智を先立てて。才學は誇り。我の
少し志まると。よく志し顔は語まば。
我の益なし。自らの才智と。何らいさ
や思へど。識者のいやむ所なり。大和
小學

第四章

おるの拙き人も。人の上を識り人せ
責むるとい。明かなるあり。さしも賢く
明のふる人も。身の上の悪しきを知る
とい。暗し。只人の上を責むる心。不て。巴
我責め。我が身をゆるま。心不て。人をゆ
ふさば。大やう空し。あらん。女小學
我が身を尤めて。人をうらみ。ざれば。物
ふさから。なば。て。我が氣常は快し。我

我ゆるして人を尤めうらむ時ハ心の
憂へくるし。己む時なり。秘事記

聖人を以て。我が身正すべし。聖人を
以て。人と正すべし。凡人を以て。人
をゆるすべし。凡人を以て。我が身をゆ
るす。大和俗訓

人の惡しきをばゆるすべし。我が惡し
きを人ゆるさるべし。人の惡し

きをゆるさるる。心の量狭し。我が惡
しきを人ゆるされんとを思ふ人ハ。
鄙狭の至りなり。同上

人。對して道を行ふ。人。我。不。從。を。す
ば。人を責むべし。唯我が身。不。立。ち
反りて求むべし。是。と。自。反。といふ。此。工
夫。肝。要。あり。人を愛して。人。我。を。親。し。ま
ず。我。が。愛。の。未。だ。至。ら。ざる。故。と。思。ふ

べし。人を禮しむ。人。我。不。無。禮。有。ら。ば。我。
が。禮。未。だ。至。ら。ざ。る。故。と。思。ふ。べし。是。人。
を。責。め。ず。し。て。我。が。身。不。反。り。求。む。る。工。
夫。有。り。斯。く。の。如。く。ま。れ。ば。人。從。ひ。や。す。
し。從。い。ざ。る。を。猶。不。我。が。誠。の。以。た。ら。ざ。
る。こ。思。ひ。其。誠。を。勤。む。べし。我。は。誠。あ。ま。
り。人。背。く。は。道。理。も。な。ま。き。妄。人。有。り。同。上。

第五章

凡そ父母主君の恩相並びて至りて重
し。此恩を忘るるをむくい人。不非をと思
ふべし。報いずんば。何る處のうら。是を
報いんと思ふ。道を學びて行ふ。よ。あ
る。他。の。道。あ。る。べ。し。う。ら。は。大。和。俗。訓。

司馬溫公の曰く。人の恩を受けず。そ
むくふ。忍びざるもの。を。其人。必。忠。孝
有。ら。ん。と。此。言。道。理。至。極。せ。り。然。る。に。恩。

を受けて忘るゝものぞ。忠孝にもつゝあるべし。忠孝も君父の恩を忘るゝざる道あり。俗語ふ恩を知らざるは木石ふむとていへるも。恩を知らざるは人の心あきをいふなり。同上

人の生涯ふを恩をうくると多し。凡そ人の恩をうけば心ふ銘して忘るべからず。一言の情をも感ず。一事の志も

も心ふおけて思ふべし。人の情あきを感ぜば人の志も空しくするは。無下ふ心あきなり。同上

古語よ曰く。恩を施して念ふとあかき。恩を受けて忘るゝとたつれ。人ふ恩を施さば。是我がなすべき當然の道と思ひて。重祿て其施したるを忘るべし。思ひ出たを忘るゝは恩を施しある

こと。恩たらしくすむ。見ざる。又人の
の恵みを受けず其恩を忘るべからず。
必ず報いんとを思ふべし。同上
人の性よりて無學なる俗人亦も恩
を忘さずして節義を法とめ禮を闕る
ざるものあり。是其天性の勝きたる所
なり。其善行貴ぶべし。又よの常事。
才ありて惡人ならざれども舊恩を忘

新くその有り。義なり。こいふ。同上
凡そ人のおどおしを受け恩を蒙り。或
も我を君ふまめたる恩あらば。永く
忘るべからず。なりぬしの禮義を法と
むべし。又くくを忘るべからず。或は
初め小治こむまごも。誠まくなき人ハ
又くきをぬまば。必ず舊恩を忘さず。問
ひ來るとたふさし。始終一の如くある

能く。凡そ恩を知らざるは。世の凡人乃
ならず。ひふれば。責むる不足らば。我の身。
かくる薄き人情。不ならひて。恩を忘る
べからず。同上

衆人の人の恩を厚く受けても。忘まや
す。是其人の常なれば。怒り尤むべの
らば。かくの如き人。必ずかくの如く。
恩を忘るるものぞと。知るべし。恨ま尤

むるは。おるのなり。家道訓

第六章

吾の身の足るを。知りて。分小安んを
る人。稀なり。是分外を願ふより。樂
しきを失へり。知足の理を。よく思ひて。
常不忘るべし。足るを。我知まば。貧
賤。ふしきも。樂しむ。足るを。知らざれ
ば。富貴を。極む。まごも。猶。不。あ。き。多。ら。ば。

して樂し。また斯くて富貴ある人の貧
賤なる人の。足まるとを。知まると。不
のふおとれ。樂訓

事なき。ば。多るふも。馴まて。何れと。た
る。の内ふも。な。不歎く。のふ。三草集

富貴貧賤。賢愚。ふよらば。只生まれつ
きたる分。有り。古人の詩。不耕。牛宿。食ふ
。藏鼠餘糧。あり。といへる。が如く。賢者

も貧しく。不肖者も富める人多し。是生
まれつき。多る分。なり。分ふ。安んじて。分
外を羨し。願ふべし。の外を願ふ。大に。
樂し。となくして。憂へ多し。禍も亦是よ
り。おこる。愚なり。といふ。魚。樂訓

平人の。得ま。くして。不慮。よ得る。寶を
喜ぶ。君子の。是を喜ぶ。唯得べき。道あ
りて得る。寶との。悦ぶ。以の。ふと。なる。

を得まざりて幸ふ得る財は必ず
禍の從ひ來たるものあればなり。大和
爲善

録

幸こい。得ざること物を得るをいふ。是其
分際の外を願ふ心深きふよりて。非常
の道を説きて。名を求め。非常の行ひを
なして。利を好む。得ざること貨財を不慮
の外ふ得んとを願ひて。且より夕へま

で。東西ふをいふ。南北はかけり。人を尤
め。天を恨みて。一生やすきふ居らば
て。憂患の道は趣々り。斯くても其身ふ
益あらまらば。以てせん。身を害し。
家を亡がし。甚しき天下國家を亂る。
心何らん人のまをふべき道は非也。大
中庸

言を出だすにも。我が身を顧て。分ふ過

小治政 卷之五
ぎたるをどぞ。いふ處のらば。分は過ぎ
ぬるを戒いへど。人は譏り笑をも。恥づ
べし。大和俗訓

第七章

天地の間は生まるゝ不どの人貴賤貧
富を論ずるをなく。人々我ふ當たり多
る所作あり。是我が生涯うつきて。定ま
りたる道理なる故。生理と名づく。此

生理うつ落ち付きて。外を求めざるを。各
こ生理不安んぶるこいふなり。六諭行
義大意
人の品を分ちていふは。農人の耕作
を清とめて。公の年貢をゆき。職人
を家藝を精しくして。所傳の習ひを失
はば。商人の賣買を以てなきて。非分の
利を求めば。まづ各こ志しを高ぬら
ずして。我ふ當たりたる職分をほとめ

が。たのづゝら我ふ當多りたる衣食ありて。一生安穩よして暮らす處也。同上
其外定まりたる産業ふくして。負擔日
備をどして。世を渡るそのあり。卑しき
諺にも。天より食物なき人をば。生せに
少いへぞ。是等の人も。怠る間なく。かせ
ぎだふせぞ。我り當たり多る衣食など
りある處也。同上

又女人も生理あり。古い國主の后さ
へ。手づゝら蠶がひ糸くりに。衣服を作
るこいへり。況や夫まより以下の人。以
さゝら怠るべし。凡そ在家の婦女
も。華麗を好まば。遊戯を樂しまず。常ふ
機おり物ぬふ業をほとめ。早く起き。晚
くいねて。辛苦を自らすべし。是女の生
理なり。同上

我が家の生業をほとめて。財を生まざる
の本より。又儉約を行ひて。財を保つ
の道とす。も一然らば。家業不怠りて。
ほとめて。財を安り。不費也。儉約不
らざるは。是困窮の基。不て。家破る。故
不家を豊ふ。財を足すの道は。家業
をつとむるよあり。又財を保ちて。失
ざる道は。儉約を行ふ不あり。家道訓

富貴の家不生まる人。曾て艱難を
經ず。常不多くの所従。かづのれ。美
服身。まま。厚味。口不飽く。以つまで
も。變をる。悔と。思ふ。らめど。一旦
時移り。勢去。ぬま。過ぎ。富貴は。
一夜の夢。こありぬ。日。る。飽。く。ら
して。何の材藝もなく。世話。さへ。や
けま。漸々。落ち。ぶれて。庶民。不。下。なる

も昔より其ためになきふあらは。六諭
大意

身元輕き人の遊樂を好むこそ。一不
うたてくれ。晝夜家業をすて。うかき
遊ぶなど。果ては家財も尽きて。朝夕
のいごなるも。さべきやうふくれ。思
ひの外。惡事と巧み出だして。災難不
何ふもあるぞ。同上

又遊樂を好むふを。何れも。我が職
分の事と。一筋守る心なく。他人の志
あをせを羨る。非分の事。成るを願ふ人
あり。以て。思慮をめぐらすこと。いへ
ども。畢竟や。志めたる心な。くれ。遂
ふ一事も。ふしおほせ。あると。是等
を。名利の心より。飽き足るを知らぬ
故なる。同上

貧家は男子多くハ。のれて早く産業と
立つる計をなまべし。貧家小女子生ま
まば。早く心づゝひしを。嫁する時の装
具を。少々のふる計をふに履し。家道訓

小學修身書卷之五

明治十六年五月十一日出板板權所有届

文部省編輯局藏板